第４章　京都大学病院構内・本部構内の立合調査

清水芳裕　　千葉　豊

第１章に記したように，2001年度に京都大学構内で実施した立合調査は７件である。このうち，病院構内で実施した２件と，本部構内で実施した１件については，とくに重要な知見が得られたので，ここで報告しておきたい。

１　病院構内ＡＦ12区・ＡＦ13区の立合調査

病院西構内に，総合研究実験棟と再生医科学研究所ＥＳ棟の新営が計画された。ともに，聖護院川原町遺跡の範囲内である。総合研究実験棟新営予定地では，2000年度に試掘調査を実施しており，近世の遺物包含層を確認したものの，中世以前にさかのぼる遺跡は確認されなかった〔京大埋文研2005　第１章〕。再生医科学研究所ＥＳ棟新営予定地周辺における過去の調査でも，中世以前にさかのぼる遺跡は発見されておらず，両新営予定地における埋蔵文化財調査は，立合調査として実施することにした（図版１－290・291）。

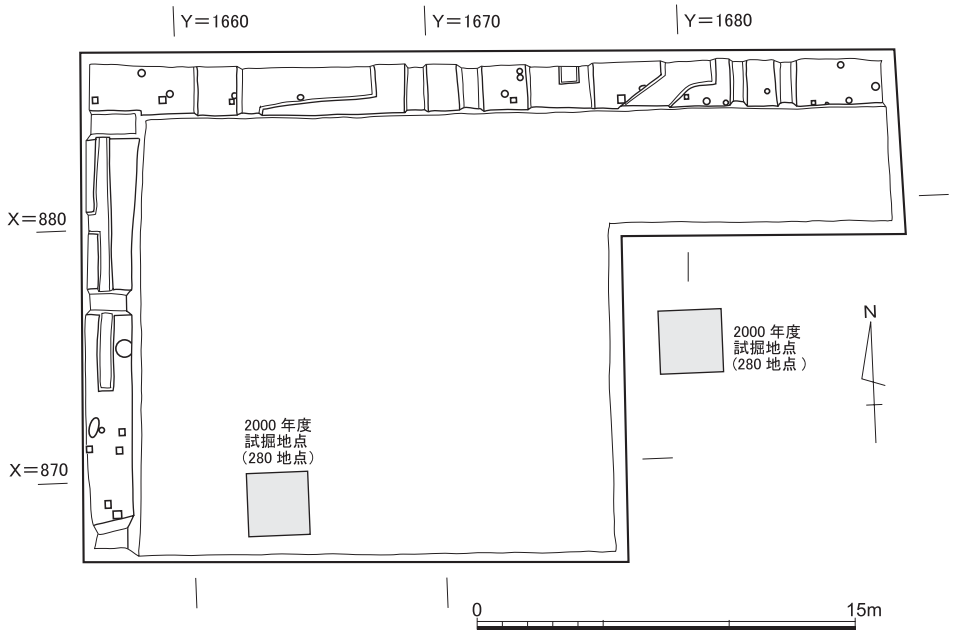

図159　病院構内ＡＦ13区の立合地点　縮尺1/300

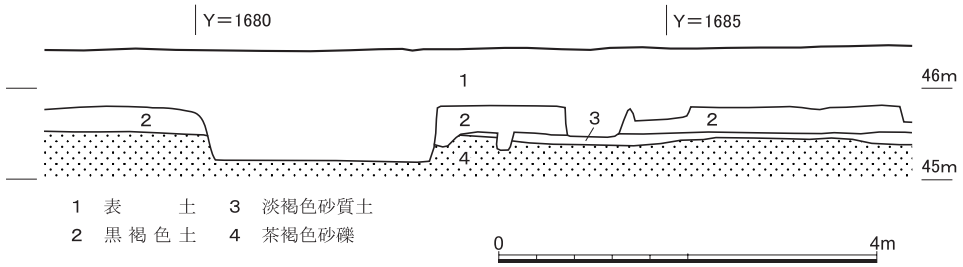

図160　ＡＦ13区北壁の層位　縮尺1/80

総合研究実験棟（ＡＦ13区）の立合調査　6月29日に開始し，7月9日に終了した。前年度の試掘調査の結果に基づき，最初に工事区域全域を地表面から60㎝前後，重機によって掘削した。その後，工事区域の北端と西端に幅2.5ｍのトレンチを設定して，手作業にて堆積土を除去しつつ，遺構・遺物包含層の有無を確認した（図159）。

現地表面は，標高46.4ｍで，ほぼ水平。上から層位を記すと，第1層は表土で，60㎝をはかる。第2層は黒褐色土で，層厚30㎝。近世後半の遺物を包含する。第3層は淡褐色砂質土で，層厚は5～10㎝。中世の土師器小片を含み，Ｙ＝1680以西では確認できなかった。第4層は茶褐色砂礫で，遺物は認められなかった（図160）。

淡褐色砂質土ないしは茶褐色砂礫上面で，遺構検出をおこなった。近世の耕作にともなうとみられる円形および方形の小穴が調査区全域で認められたものの，中世以前に遡る遺構は検出されなかった。この知見にもとづき，残りの工事区域については，重機による掘削としたが，井戸など地中深く設けられた遺構は確認されなかった。

再生医科学研究所ＥＳ棟（ＡＦ12区）の立合調査　11月7日に開始し，11月8日に終了した。工事予定地全域を重機で掘削するのにあわせて，壁面で土層の堆積状況を確認しつつ，遺構・包含層の有無を調査した。

現地表面の標高は，46.0ｍ前後。工事区域の約半分は，既設の管路などによって，下層の砂礫層まで深く掘削されていたが，1.1ｍの厚みをもつ表土のしたに，厚さ25㎝前後をはかり近世後半の土師器・陶磁器を含む黒色土のひろがりを確認した。黒色土の下層には，遺物を含まない赤褐色砂礫が堆積していた。黒色土と赤褐色砂礫のあいだには部分的に，10～15㎝の厚みをもつ淡褐色砂質土が堆積しており，中世の土師器小片が出土した。黒色土の残存部分ではこれを重機で慎重に除去し，赤褐色砂礫および淡褐色砂質土上面で遺構検出をおこなった。耕作にともなうとみられる多くの円形小穴と東西方向の小溝2本検出したため，縮尺1/100で遺構分布図を作成し，立合調査を終了した。

小　　結　ＡＦ12区と13区の立合調査地点は，直線距離で30ｍの距離をはかる。両調

査区の南に隣接する地点では，192・198地点で発掘調査〔千葉・森下1993〕，220地点で試掘調査〔京大埋文研1997　第１章〕がおこなわれており，これらの調査地点も加えて，基本的な堆積状況は同じである。表土は大学設置時の造成土で，近世の遺物を包含する黒褐色土ないしは黒色土が近世耕作土であり，その下層は茶褐色砂礫あるいは赤褐色砂礫で，高野川系流路によって形成されたものであろう。黒色土と砂礫の間にはさまる淡褐色砂質土は，全域にわたって安定して存在するものではない。中世の摩滅した遺物を含んでおり，中世後半から近世前半にかけて，この地一帯が徐々に安定してゆくのに対応して形成されたものであると理解できる。

このように，旧高野川系流路の流域内にあり不安定であったこの地が徐々に安定し，近世後半にいたって，聖護院村周辺の耕作地として利用されるようになったという従来の調査成果を補強する知見を得ることができた。

2　本部構内ＡＴ25区の立合調査

本部構内正門の西脇にある門衛所の増築工事が計画されたため，立合調査をおこなった。立合調査日は，2002年１月17日･23日である。立合地点は，吉田本町遺跡に含まれる。

本部構内西半には幕末に尾張藩邸が築かれており，この地点付近に東西方向の堀がめぐっていた可能性が絵図や従来の調査から予想されたため，堀の有無にとくに留意して，南北方向のトレンチを２本設けて，調査をおこなった（図版１－293，図161）。

この結果，上部は大学造成時に削平を受けていたものの，尾張藩邸の堀跡にあたるとみられる溝状の落ち込みを確認することができた。溝状の落ち込みは，3.6ｍの距離をはかる２つのトレンチでともに認められ，東西方向に伸びる溝であることが確認できた。西ト

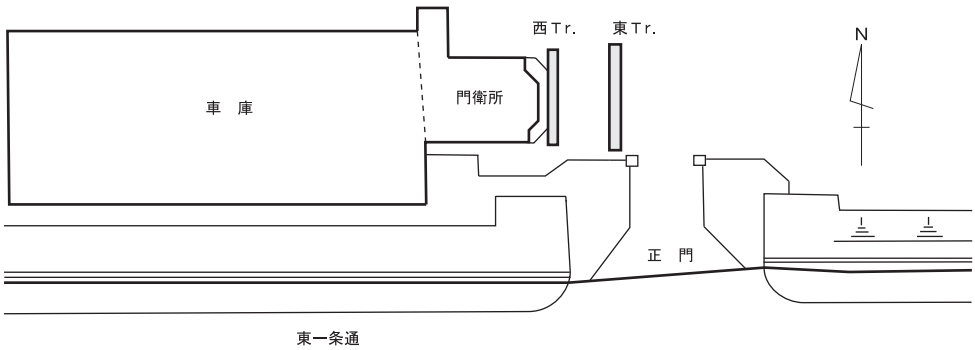

図161　本部構内ＡＴ25区の立合地点

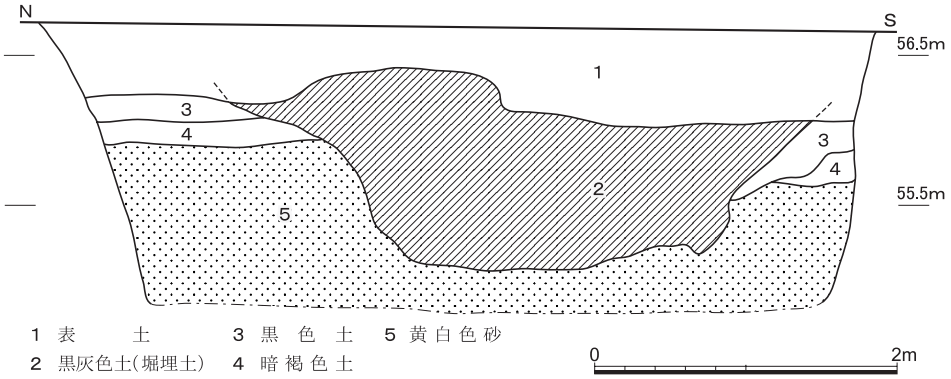

図162　西トレンチ東壁の層位　縮尺1/50

レンチ東壁の層位を図162に示す。幅４ｍ前後，検出面からの深さ1.1ｍ前後をはかるが，本来存在すべき中世～近世の堆積層が大学造成時に削平されているため，幅，深さともに，もう少し大きかったと推定できる。埋土は，黒灰色土の単層であり，廃絶時に一気に埋め戻されたものと想定する。

溝以外の堆積状況は，上から表土（第１層），黒色土（第３層），暗褐色土（第４層），黄白色砂（第５層）である。第１層は大学造成土。第３層は遺物をほとんど含まないため判断が困難であるが，周辺の調査成果からみて，古代以前の可能性が高い。第４層も遺物を含まなかった。先史時代に遡ると判断する。黄白砂は調査地周辺の基盤層である。

尾張藩邸を画する堀については，89地点で東南コーナー〔五十川1981〕，188地点で南を画する堀〔京大埋文研1990　p.2〕，277地点で西を画する堀（本年報　第２章）を確認している。272地点でも，時期不明の大溝を立合調査で発見しており〔冨井2003〕，近世であれば西を画する堀の一部であろう。このように，尾張藩邸の四周を囲っていたとされる堀のうち，南側と西側については考古学上の情報も増加している。今後は，東側，北側を画する堀にかんして，知見を得ることが重要な課題となろう。

また，調査地点のベースをなす黄白色砂は，弥生前期末の洪水性堆積物である黄色砂とは，色調や粒性からみて，異なると判断した。この理解が正しければ，この地点には黄色砂は分布しないことになる。先史時代の地形についても，新たな情報を付け加えることになった。